

鹿児島県における高等学校の教育課程の研究

—新学習指導要領（教科・科目）の実施状況—

佐々木 英 一

(1995年10月16日 受理)

Survey on the New Curriculum of Upper Secondary Schools

in Kagoshima Prefecture

Eiichi SASAKI

1. はじめに

1989年3月に告示され、1994年から実施されている高等学校の新学習指導要領は、生徒の選択履修の幅を広げ、教育課程の編成において各学校の創意工夫の余地を大きくし、教科・科目の構成・内容についても大幅な改定が行われ、全体として特色ある学校・学科づくりがねらわれたものといわれている。

具体的には、従来の学校選択中心から生徒選択に十分配慮した教育課程にするために、必修科目についても選択必修科目を増やし履修学年の指定をはずす、「その他の科目」「その他特に必要な教科」を従来のように限定を設けず、一般的に設けられる、多様な進路に対応した教育課程を作るために、普通科においても職業に関する教科・科目を積極的に取り入れる等の措置が打ち出されている。

また、従来のように履修した科目はすべて修得しなければならないとする運用を改め、両者を区別し、卒業・進級制度の弾力化を提起している。

本稿は、1995年2月に実施した調査に基づき、こうした内容を持つ高等学校新学習指導要領の趣旨が、鹿児島県の高等学校の教育課程においてどのように実現されているかを教科・科目の開設、履修状況に焦点を絞り、現状を明らかにすることを目的とする。

一般に高校の教育課程の研究は非常に遅れているといわれている¹⁾。特に、今回の学習指導要領に関する研究は、いわゆる新学力観との関係で小・中学校のそれに集中し、高校の研究が乏しい。

さらに、学習指導要領に関する研究は理想的・理論的研究に比べて実態を明らかにした研究が少ない。

こうした状況の中で、高等学校における新学習指導要領の実施状況については、これまで1994年

4月に全国の公立高等学校を対象に行われた文部省調査「新高等学校学習指導要領への取り組み状況調査」²⁾(以下、文部省調査と呼ぶ)がある。これは、1994年度の教育課程の編成状況を、週当たり授業時数、卒業に必要な修得単位数、履修即修得の見直し状況、学年の修了認定の弾力化状況、科目の開設状況(開設科目数)、「その他の科目」等の開設状況について調査している。

また、具体的な高等学校における教育課程編成過程については名古屋大学の佐々木享らの研究³⁾がある。ここでは、いくつかの高等学校における教育課程作成過程の事例研究と、高等学校の教育課程の一般的な問題および新学習指導要領の問題点が指摘されている。ここでは、家庭科などいくつかの教科・科目についての言及はあるけれども、個々の教科・科目についての調査は行われていない⁴⁾。

その他にも、詳細は把握できなかったものの、全国高等学校長協会が新教育課程の実施状況に関するアンケートを、また全国普通科高等学校長会の教育課程研究委員会も「特色ある学校づくりのための教育課程の実施に関する調査」を行っている⁵⁾。前者は、家庭科の履修状況、週5日制、選択科目、卒業に必要な修得単位、進級制度等について、後者は、各都道府県6校ずつ282校を対象とし、コース別編成、家庭科、週5日制、進級・卒業認定条件などについて調査している。

しかし、いずれの調査も、個々の科目の開設、履修・設定単位数等については明らかにしていない。1994年末の段階では文部省も、「新学習指導要領に基づいた科目開設状況についてはまだ分析していない」⁶⁾。状況にあり、新学習指導要領を正確に評価していく上で、現在、これについて早急に把握する必要がある。本研究は、一つの県の公立高等学校の教育課程をほぼ網羅的にカバーすることにより、具体的な教科・科目開設・履修状況を明らかにし、従来の調査・研究の空白を埋めようとするものである。

2. 調査の概要

本稿は、本年2月から3月にかけて鹿児島県内のすべての高等学校に依頼し、送付された教育課程表(主に学校要覧にしめされたもの)及び進級・卒業判定基準内規等の資料の分析に基づいている。鹿児島県の高等学校は、公立82校、私立23校計105校ある。このうち公立高等学校79校(96.3%)、私立高校17校(73.9%)から回答を得た。私立高校は、コースや履修形態が複雑で公立校とは別の検討が必要だと思われるので今回の分析対象からは除外した。

94年度の鹿児島県の82の公立高等学校の概要は以下の通りである。普通科のみの高校は26校、普通科に加え、理数科、人文科、情報科学科、国際教養科、英語科等の「その他の学科」を併設する高校が7校、工業高校は8校、商業高校は6校(分校1校を含む)、水産高校1校、農業高校は8校、そして普通・工業・商業・農業・家庭・看護・その他の学科を複数含む高校が26校ある。生徒の分布は、普通科に54.6%、工業に13.5%、商業に17.3%、農業に4.7%、水産に0.6%、家庭に5.3%、看護に0.4%、その他3.6%となっている。全国の比率(1993年)と比較すると、普通科が少なく

(全国74%但し、これには私立も含まれている)、その分専門学科の比率が高い。

回答を得た公立高等学校79校の内2校は資料が不十分なため(第1学年次から3学年次までの教育課程が完全に示されていない)、最終的には77校(すべて全日制、全体の94%)の教育課程が分析対象となった。教育課程はコース(普通科文系、理系など)やいわゆる小学科(機械科、情報処理科、農業機械科など)ごとにあるので教育課程の総計は199となる。以下のデータの百分比等は、特に、工業高校、商業高校等とことわらない限りこの学科・コースの教育課程を母体としており、学校を母体としていない。

教育課程は各教科・科目の履修単位数、普通科目単位数、専門科目単位数等を集計し、大学科(普通科、専門学科、その他の学科)、学校類型(進学伝統普通高校、その他の進学普通高校、非進学普通高校、工業高校、商業高校、農業高校、複合高校-複数の大学科を併置)、学科・コース(文理の区別なしの普通科、普通科文系、普通科理系、人文・英語・理数などのその他の学科、工業、商業、農業、家庭、水産、看護)とのクロス集計を行いその特徴を分析した。科目ごとの分析は、専門科目についてはその種類が非常に多いので、今回は普通科目に限った。

なお、すでに指摘されているように、実際の教育課程は、特に進学校では公表されている教育課程と異なっている場合が多い。また、本研究では、履修単位数に幅がある場合多い方をとっており、(例えば、5~7とされている場合、7単位として処理している。)全体として単位数が多くなっている。以上2点を予めことわっておく。

3. 調査の結果

1) 普通科目・専門科目単位数

普通科の普通科目総単位数は、96-99(3年間)がもっとも多く45.9%を占めている。専門学科の普通科目は51-55(42.4%)56-60(31.4%)が大勢を占めている(表1)。また、進学校ほど多いのが特徴である(表2)。

表1. 大学科ごとの普通科目単位数

単位数	44以下	45-50	51-55	56-60	61-65	66-70	71-85	86-90	91-95	96-99	計
普通科	0	0	0	1	0	0	3	13	23	34	74
専門学科	0	18	50	37	9	2	2	0	0	0	118
その他	0	0	2	1	0	3	0	0	0	1	7
計	0	18	52	39	9	5	5	13	23	35	199
普通科	0.0	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	4.1	17.6	31.1	45.9	100%
専門学科	0.0	15.3	42.4	31.4	7.6	1.7	1.7	0.0	0.0	0.0	100%
その他	0.0	0.0	28.6	14.3	0.0	42.9	0.0	0.0	0.0	14.3	100%
計	0.0	9.0	26.1	19.6	4.5	2.5	2.5	6.5	11.6	17.6	100%

表2. 学校類型と普通科目単位数

単位数	-44	45-50	51-55	56-60	61-65	66-70	71-85	86-90	91-95	96-99	計
伝統進学	0	0	0	0	0	0	0	0	4	18	22
その他進学	0	0	1	1	0	3	0	0	1	13	19
非進学普通	0	0	0	1	0	0	2	5	9	3	20
工業高校	0	5	13	6	6	0	0	0	0	0	30
商業高校	0	0	1	9	1	0	1	0	0	0	12
農業高校	0	6	16	5	0	0	0	0	0	0	27
複合高校	0	5	21	17	2	2	2	8	9	1	67
水産高校	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
計	0	18	52	39	9	5	5	13	23	35	199
伝統進学	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	18.2	81.8	100%
その他進学	0.0	0.0	5.3	5.3	0.0	15.8	0.0	0.0	5.3	68.4	100%
非進学普通	0.0	0.0	0.0	5.0	0.0	0.0	10.0	25.0	45.0	15.0	100%
工業高校	0.0	16.7	43.3	20.0	20.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
商業高校	0.0	0.0	8.3	75.0	8.3	0.0	8.3	0.0	0.0	0.0	100%
農業高校	0.0	22.2	59.3	18.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
複合高校	0.0	7.5	31.3	25.4	3.0	3.0	3.0	11.9	13.4	1.5	100%
水産高校	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
計	0.0	9.0	26.1	19.6	4.5	2.5	2.5	6.5	11.6	17.6	100%

本調査では、伝統進学校は11、その他の進学校7、その他の普通高校13、工業高校8、商業高校6、農業高校7、複合高校24、水産高校1で分類している。ただし、表中の実数は課程毎にカウントしている。

今回の改訂の特徴の1つである普通科における「職業等に関する基礎的な教育の機会」の拡充にも関わる、普通科における専門科目の実施状況については、普通科全体の29.7%が実施している。しかし、その内訳を見ると伝統進学校はすべて専門科目を課していないのに対し、非進学系の普通科の60%が専門科目を設けている。その多くは、商業の情報処理、流通経済、簿記、計算事務、及び家庭の食物・保育・被服である。また、「その他の進学校」では、理数科の「理数数学」、「理数物理」、英語科の「時事英語」、「英語表現」等の、普通科目に近い専門科目と「情報処理」が専門科目として設けられている。いうまでもなくこれらの科目は職業教育との関係はきわめて薄い。

一方、専門学科の専門科目の単位数は、36-40が62.7%で最も多く、次いで41-45が18.6%、31-35が16.1%となっている。傾向としては、水産、家庭、農業、工業、商業の順に専門科目単位数が多くなっている(表3)。商業が少ないのは、普通科目の英語が10単位まで専門科目として認められることと関係していると思われる。実際に、商業系学科の56.3%が英語Ⅱを4単位以上履修している。これは、他の専門学科に比べると格段に多い。

表3. 専門科目単位数

単位数	30	31-35	36-40	41-45	46-49	計
工業課程	0.0	2.3	84.1	13.6	0.0	100%
商業課程	3.1	50.0	46.9	0.0	0.0	100%
農業課程	0.0	6.7	53.3	33.3	6.7	100%
家庭課程	0.0	4.2	54.2	41.7	0.0	100%
水産課程	0.0	0.0	0.0	50.0	50.0	100%
看護課程	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	100%
計	1.5	10.1	38.2	11.6	1.0	100%

2) 総時数(週当たり時数)

今回の学習指導要領では全日制課程においては、週当たり32単位時間(3年間で96単位時間)を標準としている。学校別に見ると、31時間以下は0、標準の32時間が27校(35.0%)、33時間が26校(33.8%)、34時間22校(28.6)、35時間、36時間各1校(0.4)となる。これを、文部省調査の結果(31時間以下10.3%、32時間20.1、33時間26.0、34時間34.8、35時間以上8.8)と比較すると、32-33時間が多く学習指導要領の趣旨が徹底していると考えられる。

しかし、表4に見られるように非進学系の普通高校や専門高校のほとんどが33時間以下なのに対し、進学高校は34時間以上がほとんどで最高は3年間で107時間である。鹿児島県の進学校の場合、実際にはこれに多くの課外(補習)授業が加わる。専門学科では工業が比較的少なく、商業と水産がやや多い分布となっている(表5)。文部省調査と比べた場合、鹿児島県の普通科の分布がやや多めにシフトしているもののほぼ重なるのに対し、専門学科の場合、週時数は明らかに少ない。すなわち、32時間は全国30.1%に対し66.9%、34時間は全国28.0%に対し5.9%となっている。

表4. 高校類型別総時数(3年間)(週当たり時数はこの1/3)

時数	-93	94-97	98-100	101-104	105-	計
伝統進学	0.0	0.0	9.1	72.7	18.2	100%
その他進学	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	100%
非進学普通	0.0	25.0	55.0	20.0	0.0	100%
工業高校	0.0	93.3	0.0	6.7	0.0	100%
商業高校	0.0	25.0	75.0	0.0	0.0	100%
農業高校	0.0	77.8	22.2	0.0	0.0	100%
複合高校	0.0	52.2	38.8	9.0	0.0	100%
水産高校	0.0	50.0	50.0	0.0	0.0	100%
計	0.0	46.7	27.6	23.6	2.0	100%

表5. 専門学科の総時数(週当たり時数)

時数	-93	94-99	98-100	101-104	105-	計
工業課程	0.0	84.1	11.4	4.5	0.0	100%
商業課程	0.0	43.8	50.0	6.3	0.0	100%
農業課程	0.0	53.3	33.3	13.3	0.0	100%
家庭課程	0.0	75.0	20.8	4.2	0.0	100%
水産課程	0.0	50.0	50.0	0.0	0.0	100%
看護課程	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100%

3) 教科・科目

次に、教科・科目ごとに状況とその特徴を見ていく。

a) 国語

必修科目の国語Ⅰは普通科の82.5% (表6)、工業の61.4%が標準の4単位をこえる5単位を課している(表7)。専門学科の70.3%は4単位である。今回の改訂で準必修から選択科目となった国語Ⅱは、普通科の43.2% (伝統進学校45.5%, その他の進学校84.2%) が開設していない(表8, 9)。これに対し専門学科の88.1%が開設している(表8)。国語表現(22.6%), 及び今回新設された現代語、古典講読は全体として開設率が低い(7.5%, 9.5%)。しかし、工業高校の13.3%が国語表現に4単位を当てているのが目立つ。現代文、古典Ⅰ、Ⅱは専門学科ではほとんど開設されていない。古典Ⅱは開設が進学校に偏っている。

表6. 国語Ⅰ単位数(大学科)

単位数	0	1	2	3	4	5	6	7	計
普通科	0.0	0.0	0.0	0.0	17.6	75.7	6.8	0.0	100%
専門学科	0.0	0.0	0.0	0.0	70.3	26.3	2.5	0.8	100%
その他	0.0	0.0	0.0	0.0	28.6	71.4	0.0	0.0	100%
計	0.0	0.0	0.0	0.0	49.2	46.2	4.0	0.5	100%

表7. 国語Ⅰ単位数（小学科・課程）

単位数	0	1	2	3	4	5	6	7	計
文理なし普通科	0	0	0	0	10	9	1	0	20
普通科文系	0	0	0	0	2	24	2	0	28
普通科理系	0	0	0	0	2	23	2	0	27
人文・理数・英語等	0	0	0	0	1	5	0	0	6
工業課程	0	0	0	0	17	27	0	0	44
商業課程	0	0	0	0	30	1	1	0	32
農業課程	0	0	0	0	13	2	0	0	15
家庭課程	0	0	0	0	20	1	2	1	24
水産課程	0	0	0	0	2	0	0	0	2
看護課程	0	0	0	0	1	0	0	0	1
計	0	0	0	0	98	92	8	11	99
文理なし普通科	0.0	0.0	0.0	0.0	50.0	45.0	5.0	0.0	100%
普通科文系	0.0	0.0	0.0	0.0	7.1	85.7	7.1	0.0	100%
普通科理系	0.0	0.0	0.0	0.0	7.4	85.2	7.4	0.0	100%
人文・理数・英語等	0.0	0.0	0.0	0.0	16.7	83.3	0.0	0.0	100%
工業課程	0.0	0.0	0.0	0.0	38.6	61.4	0.0	0.0	100%
商業課程	0.0	0.0	0.0	0.0	93.8	3.1	3.1	0.0	100%
農業課程	0.0	0.0	0.0	0.0	86.7	13.3	0.0	0.0	100%
家庭課程	0.0	0.0	0.0	0.0	83.3	4.2	8.3	4.2	100%
水産課程	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100%
看護課程	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100%
計	0.0	0.0	0.0	0.0	49.2	46.2	4.0	0.5	100%

表8. 国語Ⅱ単位数（大学科）

単位数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	計
普通科	43.2	0.0	0.0	2.7	29.7	17.6	2.7	2.7	1.4	100%
専門学科	11.9	0.0	2.5	22.0	30.5	24.6	7.6	0.8	0.0	100%
その他	71.4	0.0	0.0	0.0	0.0	28.6	0.0	0.0	0.0	100%
計	25.6	0.0	1.5	14.1	29.1	22.1	5.5	1.5	0.5	100%

表9. 国語Ⅱ単位数 (学校類型)

単位数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	計
伝統進学	45.5	0.0	0.0	9.1	22.7	13.6	0.0	9.1	0.0	100%
その他進学	84.2	0.0	0.0	0.0	5.3	10.5	0.0	0.0	0.0	100%
非進学普通	40.0	0.0	0.0	0.0	20.0	35.0	5.0	0.0	0.0	100%
工業高校	23.3	0.0	0.0	63.3	6.7	6.7	0.0	0.0	0.0	100%
商業高校	0.0	0.0	0.0	16.7	41.7	25.0	16.7	0.0	0.0	100%
農業高校	22.2	0.0	7.4	0.0	37.0	33.3	0.0	0.0	0.0	100%
複合高校	4.5	0.0	0.0	7.5	46.3	26.9	11.9	1.5	1.5	100%
水産高校	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
計	25.6	0.0	1.5	14.1	29.1	22.1	5.5	1.5	0.5	100%

b) 地理・歴史/公民

必修とされた世界史AあるいはBについては、進学校の3割前後がAをとらずBを4-6単位課している(表10)。商業の一部を除く専門学科はほとんどAを履修している。日本史Aも進学校および専門学科の6割が開設していない。地理も日本史と大体同様の傾向を示している。以前必修科目であった現代社会は、普通科の73%、進学校の90%が開設していない。専門学科は85.6%が履修させている(表11)。倫理は全体の60.8%、普通科の21.6%、専門学科の88%、政治・経済は全体の51.8%、普通科の14.9%、専門学科の77.1%が開設していない。

表10. 世界史B単位数 (学校類型)

単位数	0	1	2	3	4	5	6	7	計
伝統進学	13.6	0.0	0.0	0.0	27.3	31.8	22.7	4.5	100%
その他進学	15.8	0.0	0.0	0.0	42.1	26.3	10.5	5.3	100%
非進学普通	15.0	0.0	0.0	0.0	30.0	40.0	15.0	0.0	100%
工業高校	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
商業高校	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
農業高校	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
複合高校	74.6	0.0	0.0	0.0	17.9	7.5	0.0	0.0	100%
水産高校	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
計	65.3	0.0	0.0	0.0	16.1	12.6	5.0	1.0	100%

表11. 現代社会単位数 (大学科)

単位数	0	1	2	3	4	5	計
普通科	73.0	0.0	0.0	0.0	24.3	2.7	100%
専門学科	14.4	0.0	2.5	0.0	83.1	0.0	100%
その他	85.7	0.0	0.0	0.0	14.3	0.0	100%
計	38.7	0.0	1.5	0.0	58.8	1.0	100%

c) 数学

必修の数学Ⅰは、専門学科の方が普通科よりも履修単位数が多い。標準をこえて5単位以上を課す比率は、伝統進学校0、その他の普通科35%、工業38.6%、家庭58.4%、農業46.7%、商業40.7%となっている(表12)。これは、いわゆる数学の基礎学力と関係していると思われる。また、数学Ⅱは、普通科の48.7%が標準をこえる4単位以上課している。専門学科も87.3%が履修している(表13)。特に、工業課程は88.7%が標準の3単位以上履修している(表14)。これに対して、数学Ⅲは、全体の78.3%、専門の99.2%が開設していない。数学A、B、Cについては普通科ではこの順に履修率が多い(非開設各々1.4%、5.4%、35.1%)。専門学科では約半数がAを開設しているが、B、Cについてはほとんど開設されていない(非開設各々49.2%、88.1%、100%)。Cについては、大学入試センター試験の科目に入っていないにもかかわらず進学校の多く(伝統進学校86.3、新設進学校63.2%)が開設している点は、これを少人数指導を行える科目として受験対策の学習として利用する向きがあるという佐々木らの指摘⁸⁾と関係するかもしれない。

表12. 数学Ⅰ単位数(小学科)

単位数	0	1	2	3	4	5	6	7	計
文理なし普通科	0.0	0.0	0.0	5.0	55.0	35.0	0.0	5.0	100%
普通科文系	0.0	0.0	0.0	0.0	75.0	14.3	7.1	3.6	100%
普通科理系	0.0	0.0	0.0	0.0	88.9	11.1	0.0	0.0	100%
人文・理数・英語等	33.3	0.0	0.0	0.0	66.7	0.0	0.0	0.0	100%
工業課程	0.0	0.0	0.0	0.0	61.4	22.7	6.8	9.1	100%
商業課程	0.0	0.0	0.0	0.0	59.4	18.8	18.8	3.1	100%
農業課程	0.0	0.0	0.0	0.0	53.3	26.7	20.0	0.0	100%
家庭課程	0.0	0.0	0.0	8.3	33.3	41.7	16.7	0.0	100%
水産課程	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	50.0	50.0	0.0	100%
看護課程	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100%
計	1.0	0.0	0.0	1.5	61.8	22.6	9.5	3.5	100%

表13. 数学Ⅱ単位数(大学科)

単位数	0	1	2	3	4	5	6	計
普通科	1.4	0.0	0.0	50.0	28.4	12.2	8.1	100%
専門学科	12.7	0.0	21.2	41.5	15.3	9.3	0.0	100%
その他	42.9	0.0	0.0	28.6	28.6	0.0	0.0	100%
計	9.5	0.0	12.6	44.2	20.6	10.1	3.0	100%

表14. 数学Ⅱ単位数 (小学科)

単 位 数	0	1	2	3	4	5	6	計
文理なし普通科	10.0	0.0	0.0	35.0	20.0	20.0	15.0	100%
普通科文系	0.0	0.0	0.0	42.9	28.6	17.9	10.7	100%
普通科理系	0.0	0.0	0.0	66.7	33.3	0.0	0.0	100%
人文・理数・英語等	50.0	0.0	0.0	33.3	16.7	0.0	0.0	100%
工業課程	0.0	0.0	11.4	52.3	18.2	18.2	0.0	100%
商業課程	15.6	0.0	25.0	40.6	15.6	3.1	0.0	100%
農業課程	13.3	0.0	26.7	33.3	13.3	13.3	0.0	100%
家庭課程	25.0	0.0	29.2	33.3	12.5	0.0	0.0	100%
水産課程	50.0	0.0	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0	100%
看護課程	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
計	9.5	0.0	12.6	44.2	20.6	10.1	3.0	100%

d) 理科

総合理科を開設しているのは、専門学科の7課程(4%)にすぎない。物理はⅠAでは普通科の83.8%, 専門学科の48.3%, 全体の62.8%が開設していない。物理ⅠBは専門学科の89.8%, 全体の65.3%が開設していない。物理Ⅱは専門学科のすべて、普通科の41.9%, 全体の77.4%が開設していない。化学は物理に比べて開設率が高い。化学ⅠAでは開設していないのは、普通科の73.0%, 専門学科の19.5%, 全体の40.7%である。化学ⅠB及び化学Ⅱは専門学科の開設率が下がるものの、物理よりも高い。生物は、比較的よく開設されているが、専門学科でのばらつきが大きい。生物ⅠAでは工業課程の90.9%が開設していないのに対し商業課程の96.9%, 農業課程の80.0%が開設している(表15)。生物ⅠBでは工業課程、商業課程がほとんど開設していないのに対し、農業課程では半数が開設している。生物Ⅱは専門学科では全く開設されていない。開設率が最も低いのは地学である。地学ⅠA, ⅠB, Ⅱの非開設率は全体で88.9%, 81.9%, 85.9%で、専門学科では地学ⅠBおよび地学Ⅱは全く開設されていない。比較しやすい普通科における履修状況を科目で比較すると地学の開設率が最も低く、次いで物理, 生物, 化学となる(表16)。専門学科では工業が物理ⅠA, 化学ⅠAを多く履修させているのに対し、商業・農業はほとんどが生物ⅠAを履修させている。地学はⅠAで8.5%が開設しているのみで、皆無と断言していい。

表15. 生物 I A 単位数 (小学科)

単 位 数	0	1	2	3	4	5	計
文理なし普通科	55.0	0.0	25.0	10.0	10.0	0.0	100%
普通科文系	78.6	3.6	14.3	0.0	0.0	3.6	100%
普通科理系	74.1	3.7	18.5	0.0	3.7	0.0	100%
人文・理数・英語等	50.0	0.0	33.3	0.0	16.7	0.0	100%
工業課程	90.9	0.0	9.1	0.0	0.0	0.0	100%
商業課程	3.1	0.0	68.8	12.5	15.6	0.0	100%
農業課程	20.0	0.0	33.3	26.7	20.0	0.0	100%
家庭課程	37.5	0.0	50.0	8.3	4.2	0.0	100%
水産課程	50.0	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0	100%
看護課程	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	100%
計	55.3	1.0	29.6	6.5	7.0	0.5	100%

表16. 普通科における理科科目開設状況

化学 I A	27.0	生物 I A	28.4	物理 I A	16.2	地学 I A	12.2
化学 I B	97.3	生物 I B	98.6	物理 I B	74.3	地学 I B	45.9
化学 II	73.0	生物 II	75.7	物理 II	58.1	地学 II	37.8

e) 外国語 (英語)

英語 I の履修状況も数学 I と同様の傾向が見られる。すなわち英語の基礎学力と履修単位数が反比例している。進学校の多くが 3-4 単位なのに対し、非進学普通科、専門学科の相当部分が 5 単位以上課している (表17)。英語 II も同様であるが、専門学科の 47.5% は開設していない。ただし、専門科目として読み替えられる商業では 84.4% が履修している。今回開設された、オーラルコミュニケーション A, B, C の履修率はこの順に高い。全体で OA : 72.9%, OB : 28.6%, OC : 1.0% となっている。ただし、普通科では各々 55.4%, 51.4%, 1.4%, 伝統進学校では 13.6%, 81.8%, 4.5% となり差異が見られる。リーディング, ライティングは専門学科のほとんど (95.8%, 97.5%) が開設していない。

表17. 英語 I 単位数 (学校類型)

単位数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
伝統進学	0.0	0.0	0.0	18.2	81.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
その他進学	10.5	0.0	0.0	0.0	78.9	10.5	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
非進学普通	0.0	0.0	0.0	15.0	60.0	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
工業高校	0.0	0.0	0.0	0.0	26.7	36.7	36.7	0.0	0.0	0.0	100%
商業高校	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
農業高校	0.0	0.0	0.0	0.0	74.1	11.1	11.1	3.7	0.0	0.0	100%
複合高校	0.0	0.0	0.0	13.4	52.2	25.4	6.0	3.0	0.0	0.0	100%
水産高校	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
計	1.0	0.0	0.0	8.0	61.3	19.1	9.0	1.5	0.0	0.0	100%

f) 家庭科

今次改訂で男女とも必修となった家庭科については、家庭一般、生活一般、生活技術の開設率が、91.5%、24.1%、10.6%となっている。工業、水産の一部を除き他はすべて4単位履修している。普通科はすべて家庭一般を開設している(表18)。ちなみに、全国高等学校長協会の94年度の調査によると、公立高校普通科では家庭一般の履修が74%とされている⁹⁾。生活技術は、普通科の20.3%が開設しているが、専門学科ではほとんど設けておらず(2.5%)開設率は最も低い(10.6%)。生活一般は普通科の30%が、専門学科では商業課程(31.3%)、農業課程の25.0%が開設しているのが目立つ。

表18. 家庭一般単位数 (小学科)

単位数	0	1	2	3	4	計
文理なし普通科	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	100%
普通科文系	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	100%
普通科理系	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	100%
人文・理数・英語等	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	100%
工業課程	9.1	0.0	9.1	0.0	81.8	100%
商業課程	6.3	0.0	0.0	0.0	93.8	100%
農業課程	73.3	0.0	6.7	0.0	20.0	100%
家庭課程	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	100%
水産課程	0.0	0.0	0.0	50.0	50.0	100%
看護課程	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	100%
計	8.5	0.0	2.5	1.0	87.9	100%

単位数については、全国普通科高等学校長会の教育課程研究委員会の調査によると、4単位履修させているところは、進学校で46%に過ぎないのに対し、鹿児島では調査したすべての進学校で4単位履修している。

g) 体育, 保健, 芸術

体育については、普通科の95.9%が9単位、専門学科の97.5%が7単位としている。保健はほとんどすべてが2単位をあてている。芸術科目については、工芸が普通科のごく一部を除くとほとんど開設されいないことを除けば、音楽、美術、書道とも開設状況はほぼ同様の傾向を示している。

h) その他の教科・科目

今回の改訂の目玉の一つに、「より一層多様な教育課程を編成、実施することができるように、従前のように教科を限定することなく、一般的に「その他の科目」を活用できることとし」、「これにより普通教科においても『その他の科目』を設置することができる」¹⁰⁾ ことがある。文部省は、「『学校においては……設けることができる。』としめされている趣旨を十分理解して、各学校では、設置者と十分協議の上、地域、学校及び生徒の実態に応じ、必要がある時は、前述の『その他の科目』と併せて『その他特に必要な教科』を積極的に活用することが望ましい」¹¹⁾ として、これを積極的に活用することを求めている。文部省調査では、これに基づき全国で普通科の17.5%、専門学科の25.5%が普通科目の「その他の科目」を設けている。また、佐々木らはこれに関して「職業学科では、基礎学力補充などのために、普通教育科目についても『国語基礎』『数学基礎』など学習指導要領にない科目を新設するすくふうをこらす学校が少なくない」、「かなりの数の学科が、普通教育の教科についても『その他の科目』を設定していると思われる」¹²⁾ と指摘している。

しかし、本調査においては、1つの工業高校が「理科Ⅰ」「理科Ⅱ」という科目を設けている¹³⁾ 以外は皆無であった。この点は、鹿児島県の大きな特徴である。なお、人文科、英語科などの「その他の学科」では、「その他特に必要な教科」として「人文」「外国語」を設け、「現代文法学」、「人間理解」、「地域文化」、「英語表現」、「public speaking」などの科目が設けられている。しかし、これらは専門科目の範疇に入り、ここで問題にしている普通教育の「その他の教科・科目」とは異なるものである。

4. ま と め

最後に今回の学習指導要領の改訂のいくつかの要点に沿ってまとめておく。

第一に、多様な教科・科目を用意して生徒の多様な選択に応じるという指導要領の趣旨については、普通教育に関する教科・科目が8教科45科目から、9教科62科目に増加したにもかかわらず、これに対応した開設科目の増設がなされていない。特に現代語、古典講読、オーラルコミュニケーションC等、新設の科目の開設率が低い。また、多くの高校で地理・歴史、公民、理科などでも設けられていない科目が多数ある。とりわけ、「その他の科目」が皆無とっていい状況は、鹿児島県の大きな特徴である。したがって、全体として教科・科目の多様化については、鹿児島県では消極的な対応が目立つといえよう。

第二に、週当たり時数は学習指導要領の示す標準週32時間に従う割合が全国平均よりも高いこと

があげられる。特に、専門学科では32時間の学校が全国平均(専門学科)よりも著しく多い。換言すれば鹿児島の専門学科は他県の専門学科よりも過当たり時数が少ない。

第三に、必修家庭科は、「家庭一般」の履修率が全国よりも高く、4単位としているところが多いことがあげられる。

鹿児島県はこれまで、高校政策については文部省の政策に比較的敏感に反応してきたといわれている。今回の教育課程の調査においても、全体としては、従来通り改訂の趣旨が形式的には整えられているといえよう。しかし、多様な教科・科目の開設、学校選択から生徒選択への移行といった、教育の個別化の試金石に当たる部分については、非常に大きな抵抗があるものと推測される。もとより、多様化・個別化を進めるためには、それを保証する人的・物的な手当が不可欠であり、学校ならびに教員の意識だけを問題にすることはできない。この点で、十分な手当がなされているとはいえない。今回の調査結果から、こうした問題の所在が推測される。

最後に、本研究に当たって統計処理の作業において本学の岡本洋三教授のご教示とご助力を賜ったことを記しておく。

注

- 1) 佐々木享, 坂口謙一, 森川治人「高等学校の教育課程表作成過程に関する実証的研究(第1報)」『名古屋大学教育学部紀要-教育学科』第40巻第1号, 1993年, 187頁。
- 2) 文部省『進む高等学校教育の改革』1994年6月, 「内外教育」1994年6月28日。
- 3) 1)及び佐々木享, 坂口謙一, 佐藤史人, 森川治人「高等学校の教育課程表作成過程に関する実証的研究(第2報)」『名古屋大学教育学部紀要-教育学科』第41巻第1号, 1994年。また佐々木享「高校教育改革の現段階-1994年-」『名古屋大学教育学部紀要-教育学科』第41巻第2号, 1994年。
- 4) 1)では「各教科科目や特別活動の細目に立ち入って調査しないことは、本研究の重要な弱点である。この細目に立ち入った調査については、他日に課題としておきたい」(p.185)と述べられている。
- 5) 「内外教育」1995年6月2日及び1994年11月4日。
- 6) 「内外教育」1994年12月13日11頁。
- 7) 1) 189頁。
- 8) 佐々木享, 坂口謙一, 佐藤史人, 森川治人「高等学校の教育課程表作成過程に関する実証的研究(第2報)」『名古屋大学教育学部紀要-教育学科』第41巻第1号, 1994年, 146頁。
- 9) 「一人一人が成就感味わえる教育を-全国高等学校長協会第48回総会・研究協議会」(「内外教育」1995年6月2日, 4頁。)
- 10) 文部省『高等学校学習指導要領解説総則編』東山書房 1988年, 86頁。
- 11) 同上89頁。
- 12) 佐々木享, 坂口謙一, 佐藤史人, 森川治人, 同上, 144頁。
- 13) その具体的な内容は確認していない。